タイトル：平成 23（2011）年度　教育セミナー
日時：平成 23 年 9 月 17 日（土）～20 日（火）
場所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究　3 階　マルチメディア会議室（304）

「意味の網目を読み解くこと、紡ぐこと――マグリブ文化人類学再考」
鷹木　恵子（桜美林大学）

今回のセミナーでは、「意味の網目を読み解くこと、紡ぐこと　－　マグリブ文化人類学再考」と題して、これまでの私自身の北アフリカ・マグリブ地域の主にチュニジアにおける文化人類学の調査研究を振り返りつつ、その試行錯誤の過程や今後の課題について話をさせて頂いた。

大学学部時代に文化人類学を専攻することにした後、大学院でイスラーム地域を研究対象として選び、修士過程では米国の文化人類学者クリフォード・ギアツを取り上げて、『C.ギアツの宗教研究』と題した修士論文を書いた。その後、博士課程在籍中にチュニジアに2年間留学し、アラビア語を学びつつ、南部のナツメヤシ・オアシス農村でフィールドワークを実施した。当初、殺伐とした沙漠にしか見えなかった空間に幾つかの聖者廟があり、また数多くの口頭伝承が語り継がれていることやそれらが村の過去の出来事や歴史の記憶や記録とも結びついていることを発見し、フィールドワークがまさにギアツの言う「意味の網目を読み解く」という作業であったこと、しかしそれを一つの民族誌や著書としてまとめるには長い年月を要したこと、その間、ナツメヤシ・オアシスについての意味の網目の解読作業にも心奪われていた時期があったことなどを報告した。

しかし、博士論文執筆後は意味の網目を読み解く作業と同時に、現地の人々が今、紡ごう、紡ぎたいと考えているその意味の網目や方向性により関心をもつようになっていった。そのことから広義の「開発」の問題や実践の人類学という領域にも研究を広げていくことになり、そうした経緯で貧困削減と関わるマイクロクレジットの中東北アフリカ諸国での調査研究を実施した。しかし、今年 1 月に起きたチュニジア革命は、私自身には全く予期できなかったことで、それは研究者としての自分の能力を疑い、自信を喪失するような衝撃をもたらす出来事でもあった。ただ、この夏期の現地調査において、一般的には比較的容易に革命が達成されたように思われているチュニジアでも、未だその「革命」は続行中で、首都からはほど遠い南部の調査地の村でもベンアリー政権崩壊後には社会の不公正に異議申し立てをする幾つかの事件が起きており、村人たちも革命委員会を組織して政治社会改革に向けての活動を展開するなど、チュニジア新時代への胎動とその可能性を垣間見ることもできた。時代の変化の速さに研究者としてもまた研究調査手法もなかなか追い付かないようななか、これからもまだまだ私の暗中模索と試行錯誤は続いていくだろう。

今回のセミナーで若い大学院生の方々のやや緊張した面持ちでの研究発表を聞き、またそれに対するコメントや議論にも参加させて頂きながら、自分がいつか来た道を見るような思いと今なお自ら歩む道とがともに重なり合い共鳴するような印象深い 3 日間であった。